

ダニエル 8 : 1 - 27 (パワポ)

Preface

ダニエルが四頭の獣の幻を主なる神様より見せられてから2年後、再び、幻が現れ、今度は、一匹の雄羊と一匹の雄やぎを見せられました。

ダニエルがこの幻を見せられた場所は、エラム州のスサの城と、ウライという川のほとりでした。

ダニエル 8 : 2 (パワポ)

エラム州というのは、後に、メディア・ペルシア帝国の4つの首都のうちの1つになったところです。

そして、そのエラムにあるスサの城と、またスサの城の横を流れ、ペルシア湾に流れ込んでいるウライ川のほとりにいました。

ダニエルがこの幻を見ている時は、1節を見ますと、「ベルシャツアル王の治世の第三年」とありますが、ちょっと思い出してみてください。

ベルシャツアル王については、5章に出てきますが、自分が正式な王ではないにもかかわらず、王のような権勢を振りかざし、どんちゃん騒ぎをして、バビロン帝国を滅ぼした、あのどら息子王子です。

つまり、ダニエルがこの幻を神様から見せられていた時、彼自身・彼の体は、バビロン帝国にいました。

だから、“ダニエルがエラム州のスサの城と、ウライ川のほとりにいた”というのも、幻のうちの出来事です。

そして、先ほど言いましたように、ダニエルがいたそのエラム州のスサと、ウライ川のほとりとは、後にバビロン帝国を滅ぼして、中東世界に新たに君臨するメディア・ペルシア帝国の首都です。

神様は、まだバビロン帝国が滅びていない時に、その後に台頭してくるメディア・ペルシア帝国の首都となるところに、ダニエルを居らせて、一匹の雄羊と一匹の雄やぎの幻を見せてくださったわけです。

ダニエル 8 : 3 - 14 (パワポ)

Part Two

ダニエルは、まず、“どんな獣も立ち向かうことが出来ないほど”に強く、長さの違う二本の角を持った雄羊が川岸に立っていて、その角で、縦横無尽に突きまくっている姿を見ました。

すると、今度は、“どんな獣も立ち向かうことが出来ないほど”の（二本の角を持つ）雄羊に向かって、“際立った一本の角”を持った一匹の雄やぎが西からやってきて、激しい勢いで突進して行って、打ち倒してしまいました。

誰も、どんな獣も打ち倒すことが出来ないと思われたのに、この一匹の雄やぎは、長さの違う二本の角を持つ雄羊をぶっ倒してしまいました。

そして、この雄やぎは、非常に高ぶるのですが、誇っていた大きな一本の角が折れてしまいます。

でも、しぶとくも、今度は、その額から四本の角が生え出てきました。

さらには、この四本の角のうち、一本の角からもう一本の小さな角が生え出て来て、天の軍勢と聖所を踏みにじっていきました。

この幻を見たダニエルは、その意味を理解したいと願ったところ、天使ガブリエルが現れて、その見た幻の意味を解き明かしてくれるんです。

ダニエル 8 : 15 - 26 (パワポ)

天使ガブリエルが、二本の長さの違う角のある雄羊は、メディア・ペルシア帝国のことであり、

際立った一本の角を持ち、その角が折れた後に、四本の角が生えた雄やぎは、ギリシャ帝国を表していると教えてくれています。

確かに言われてみれば、メディア・ペルシア帝国の特徴と、ギリシャ帝国の特徴をすべて押さえている雄羊と雄やぎです。

Part Three

ここでまた少し思い出していきたいのですが、

メディア・ペルシア連合帝国を率いた王は、キュロス王でした。

キュロス王は、メディアの属国であったペルシアの王であった父と、メディア王国の王の娘であった母の政略結婚の元、生まれてきた、ペルシアの王子でした。

ところが、このキュロスはとても有能な人で、彼がペルシアの王となると、ペ

ルシアに勢いが出て来て、あべこべに、大国メディアを吸収合併し、さらに勢いをつけて、バビロン、リディア、エジプトという大国まで攻略し、やがてメディア・ペルシア連合帝国ではなく、ペルシア帝国として、中東世界を支配下に治めました。

つまり、雄羊の長い角は、ペルシアを表し、短い角はメディアを表すわけです。

これは、ダニエル書7章で見た第二の獣、三本のあばら骨を口に咥え、横向きに寝ていた熊のような獣にも相当します。

三本のあばら骨は、バビロン、リディア、エジプトを表し、横向きに寝ていたというのは、メディアを地面に押し付け、ペルシアが表舞台に煌々と現れるということを表わしていましたよね。

7章の熊のような獣の時は、横向きに寝ていることを通して、8章の雄羊の時は、長さの違う角を通して、

吸収合併され弱くなっていくメディアと、吸収合併して強くなっていくペルシアを示しているわけです。

そして、雄やぎにあたるギリシャ帝国です。

この雄やぎは、まず、西からやってきました。

つまり中東世界よりも西、ヨーロッパからやってきました。

また、この雄やぎには、“際立った一本の角”がありましたが、この一本の角は（思い出してください）、アレキサンダー大王を表しています。

アレキサンダーが王になったギリシャは、ものすごい勢いで、誰も倒すことが出来ないと思われた200年も続いたペルシア帝国を打ち破っていきました。

このギリシャがペルシア帝国を打ち破る姿を、ダニエル書8章では、“際立った一本の角を持つ雄やぎ”が、“二本の長さの違う角を持つ雄羊”に向かって、激しい勢いで突進して打ち破ったと、記しているわけです。

23歳で王になったアレキサンダーは、たった10年で、ペルシア帝国ばかりでなく、インド（つまりアジア）に至るまで、その広い領土を攻略していきました。

まさに、破竹の勢い、向かうところ敵なし状態で、征服戦争に勝利していきました。

ダニエル書7章では、このギリシャを豹のような獣と形容していますが、まさしく、豹のように獰猛で、素早いハンターのような王が、アレキサンダー大王で

した。

しかし、アレキサンダー大王の破竹の勢いは、意外にもあっけなく終わってしまいます。

その死因は、酒の飲みすぎ、マラリヤ、暗殺と色々と言われていますが、32歳の若さで亡くなってしまいました。

そして、その後、4人の部下たちによって、国が四等分されて支配されることになります。

これをダニエル書8章では、

ダニエル8：8 (パワポ)

と表しています。

ダニエル書7章では、豹のような獣に、四つの翼と四つの頭があったということで表していました。

Part Four

アレキサンダーが死んだあと、4人の王により、四分割されてギリシャが成り立っていましたが、アレキサンダーを勝るほどのリーダーは、出てきませんでした。これを、ダニエル8：22でこう言っています。

ダニエル8：22 (パワポ)

(“第一の王” というのが、アレキサンダー大王のことですね)

ただ、ここで、ギリシャについての記述が終わるのではなくて、続きがあるんです。

ダニエル8：9－12 (パワポ)

ダニエル8：23－25 (パワポ)

(“彼ら” とは、四等分されたギリシャ帝国のこと)

四本の角のうち的一本から、もう一本の小さな角が出て来て、そして、その角は、横柄で策に長けた一人の王です。

で、この王の最も大きな特徴は、「美しい国に向かって攻め上り、天の軍勢を地に落とし、神の聖所を踏みつけ、聖なる民を滅ぼし、真理を地に投げ捨てるということにおいて、成功を収めた。」ということです。

ここに出てくる“美しい国”とは、神の約束の地であるイスラエルであり、天の軍勢や聖なる民とは、神の民であるユダヤ人・イスラエル人のことであり、神

の聖所とは、字面通り神を礼拝する神殿のこと、そして、真理を投げ捨てるとは、神の言葉である聖書を焼き尽くし、まことの神を信じることを禁止し、迫害したということです。

主なる神様を信じ歩むことを辞めさせ、神の民を殺し、礼拝場を破壊し、神の言葉を焼き尽くし、まことの真理を無きものしようと試みたことにおいて、成功を収めた人物が、また新たに出て来たわけです。

それが、アンティオコス・エピファネス4世という人物です。

アンティオコス・エピファネス4世は、“四本のうちの一本の角から生え出たもう一本の小さな角”または、“横柄で策に長けた一人の王”と記されていますが、

アレキサンダー大王が死んでから、ギリシャが四等分され、そのうちのひとつにあたるセレウコス王朝の第7代目王として登場してきたのが、アンティオコス・エピファネス4世という人物です。

で、このアンティオコス・エピファネス4世が行った、聖書に記され、また世界史にも名を残す悪事が、まことの神を信じるイスラエル人・ユダヤ人たちに対する大迫害でした。

エルサレムを蹂躪し、礼拝を禁じ、神の民4万人を殺し、4万人を奴隷として売り飛ばしたのが、このアンティオコス・エピファネス4世でした。

Part Five

今、ダニエルに見せられているこの幻、啓示は、ベルシャツアル王の治世の第三年、紀元前549年のことですが、これはダニエルが住んでいたバビロンが滅び、メディア・ペルシアが台頭してくる10年前であり、

ギリシャのアレキサンダーの登場は、ダニエルにしてみれば、217年後の話ですし、イスラエルの民を迫害するアンティオコス・エピファネス4世の登場は、375年後の話です。

ダニエルは今この時、70代中盤ぐらいですから、当然生きてもいませんし、未来のことを知る由もありません。

では、なんで、神様は、こんな幻を、啓示を、ダニエルにお見せになったのか？
なんでだと思えます。

私も祈りながら、考えながら、思い巡らして見ました。

色々あると思います。

前回までのダニエル書7章を見た時も、触れましたが、永遠に続く神の主権とその栄えと国とメシヤ・キリストイエスにある救いこそ信頼に値する唯一ものであるということを示すため、

また、目に見えるこの世界が滅びることは、避けることの出来ない決まり事であるという終末観、終末信仰を教えること、

さらには、今、ダニエルが置かれているところや、その人生は言葉で言い尽くし難い辛苦があるけれども、それは砂地に立っている家のようなもので、決して永遠に続くものではないということだったり、

色々なことを示唆し、教えてくれていると思うのですが、なんでここでまた、一見すると重複のようにも見える雄羊と雄やぎの幻を見せてくださったのか？

色々、考えてみました。

そうしましたら、ひとつ気づきを与えられました。

それは、ダニエル書7章の四つの獣の表記と、ダニエル書8章の雄羊と雄やぎの表記には、違いがあるということです。

それは、ダニエル書7章の獣は、“登場”に重きが置かれているのですが、ダニエル書8章の雄羊と雄やぎは、その登場よりも、“何をしたのか”ということに重きが置かれている、表記だということです。

つまり、登場してくる雄羊と雄やぎが、何をもって、何をしているのかということが書かれてるんです。

8章の3節から25節までの動詞を探っていきますと、雄羊と雄やぎが何をしているのかが見えてきます。

3節から25節に出てくる動詞は、こういう動詞たちなんです。

“角で突いて”、“立ち向かうことが出来ず”、“思いのままにふるまって”、“高ぶっていた”、“雄羊に向かって”、“激しい勢いで突進した”、“怒り狂って”、“打ち倒して”、“角をへし折った”、“地に投げ倒して”、“踏みつけた”、“非常に高ぶった”、“強くなった”、“角が折れた”、“角が生え出て来た”、“非常に大きくなった”、“地に落として”、“踏みつけ”、“くつがえされた”、“背きを行い”、“引き渡された”、“地に投げ捨て”、“荒らす者が背き”、“踏みにじられる”、“勢力はない”、“横柄で策に長けた”、“力が強くなる”、“驚くべき破壊を行って”、“民を滅ぼす”、“欺きを成し遂げ”、“心は高ぶり”、“人を滅ぼし”、“立ち上がる”、“砕かれる” 等々です。

この動詞たちの共通点は、打った打たれた、やりやられたという、“争い”と“戦い”です。

で、これらの動詞をじっと見ながら、考えていましたら、二つのことが思い浮かびました。

それは、去年、主任牧師就任式に来てくださったフラー神学校での私の指導教官であったキョン・スー先生が、神学校にいる3年間、私に口酸っぱく何度も何度もおしゃっていたことと、

巷でも今話題になっていて、私自身もはまっている「愛の不時着」という韓国ドラマのことです。

そして、ピンと思いついた言葉が、今日の説教題の“パワーゲーム”という言葉です。

Part Six

“パワーゲーム”という言葉は、辞書で調べますと、「人間関係のなかで繰り広げられる、力の張り合いのこと。また、大国がその政治的、経済的な力を背景にして主導権を握ろうとして行う、国際政治上の駆け引き」と、出てきます。

ダニエル書8章で繰り広げられている“長さの違う二本の角を持つ雄羊”と“際立った一本の角を持つ雄やぎ”の戦いは、まさにパワーゲームです。

角で突いて、突かれて、へし折られて、踏みつけて、高ぶって、落として、くつがえされて、背いて、引き渡されて、踏みにじられて、勢力がなくなって、それでもなお立ち上がって、強くなって、欺きを成し遂げて、破壊して、人を滅ぼして、砕かれます。

正に、パワーゲームですね。

大国間のパワーゲームであり、その大国をなしている人間同士のパワーゲームです。

誰がより力があり、誰がよりその力を蓄え、誰がよりその力を発揮し、誰がよりその力をもって優位に立ち、従属させ、支配し、支配され、

そしてまた、誰が既存の力を凌駕し、圧倒し、転覆させ、新たに力を誇示するのか、まさにパワーゲームの様相をある意味わかりやすく描写しているのが、ダニエル書8章の記述です。

そして、このパワーゲーム、

何も歴史に名を残すような大国だったり、将軍だったり、リーダーや企業家の間だけで行われているのではなく、すべての人間関係やすべての社会で行わ

れていることと、

人間はいつの間にかどこでも、(会社だろうが、学校だろうか、家庭だろうが、友人関係だろうが) パワーゲームをし、常に優位に立とうとし、自分よりも弱い者を見極め、それを支配しようとする欲求を正当化して、力を誇示して生きてしまっていること、そしてこれをクリスチャンばかりか、牧師もやっているということを、キョン・スー先生が口酸っぱく教えてくださいました。

その授業の中でも、個人的に指導を受けている時でも、そして一緒に食事をしている時にも、何度も何度も、お話ししていただきました。

こうおっしゃるんです。「イエス様は、パワーゲームをなさいませんでした。だから、これから土浦めぐみ教会の主任牧師となっていく中で、決してパワーゲームをして、そのパワーゲームに勝利しようとしてははいけませんよ！もし色々な力がついてきたとしても、その力をどんどん放棄して、どんどん分配してください。パワーゲームに勝利することは、敗北することです。」と、口酸っぱく教えてくださいました。

確かに、ダニエル書 8 : 25 を見てみますと、

ダニエル 8 : 25 (パウポ)

しかし、人の手によらずに彼は砕かれる。

と、あります。

つまり、すべてのパワーゲームは、“砕かれて” 終わります。

どんなに強くて、どんなに立派でも、どんなに華々しくても、どんなに伝統があっても、パワーゲームの勝利は、“砕かれる” という敗北で終わります。

でも、世の中、このパワーゲームの繰り返しで回っています。

いつから、どこから、パワーゲームが始まったのか？

聖書に書いてありますね。

一番最初のパワーゲームは、神の前に罪を犯した最初の人アダムとエバとの間に起こりました。

つまり、人類のパワーゲームの始まりは夫婦間です。

お互い責任をなすりつけ合って、最終的には、夫アダムが肉体的威圧感を駆使して、妻エバを圧倒し、ひとまずそのパワーゲームに勝利しました。

しかし、その“いびつな勝利” は、甚だしい痛みを招きます。

アダムとエバとの間に生まれてきた長男カインと次男アベルも父母と同じよ

うに、パワーゲームをして、そのパワーゲームの結果、長男が次男を殺害してしまいました。

神にいけにえを献げるといふ礼拝行為でさえも、パワーゲームにしてしまい、怒りと嫉妬心に駆られて、兄が弟を殺してしまうのです。

それからの人類の歴史は、聖書に書いてある通りです。

創世記の3章の途中から、黙示録の20章まで、ひたすらに人間の犯してきた、そしてこれからも犯し続けるパワーゲームについて記録しています。

人類の歴史は、パワーゲームの繰り返しであり、そこから来る“いびつな勝利”に酔い、その“いびつな勝利”を手に入れるために、しゃかりきになって、血まなこになって、前のめりになって、ムキになって、ここまで刻んできた時間です。

良く、聖書の言う“罪”とは、“的外れ”とか、“神と共に生きない”ことだと言いますが、

もっと具体的に言いますと、他の人よりも力を得ようと、そして他の人よりも優位に立とうと、さらには、神よりも上に立とうと、“いびつな勝利”だけでも、勝利の味を味合わせてくれるパワーゲームに勝利しようとする生き方そのもの、姿勢を“罪”と言うのでしょ。

Part Seven

先ほど、私のはまっている「愛の不時着」という韓流ドラマがあると言いましたが、これを見ながらも本当に考えさせられます。

(機会があったら、ご覧になってもいいかもしれません。ひとまず、おもしろいです。)

僕も今、見ている途中なので、どうドラマが終わるのかはわからないのですが、韓国の財閥の長女がひょんなことから、北朝鮮に行ってしまうと、北朝鮮の軍人と恋に落ちる話なんです。

で、そのドラマで、忘れることの出来ない台詞が二つ出てきました。

一つ目の台詞は、「今、私が欲しいのは、金ではない。私が欲しいのは、殺したいと思う者を、いつでも自由に殺すことの出来る力だ！」

もう一つの台詞は、「国家の仕事だと言いながら、私のことを大切にしてくれる人を危め、私のことを人間扱いしない人のために忠誠を尽くさなければならぬ人生、こんな不幸な人生ってあるか？」という台詞です。

一方は、世のパワーゲームが与える“いびつな勝利”に酔い、それこそ快樂だと錯覚している者の発する言葉であり、

もう一方は、パワーゲームに翻弄され、そのパワーゲームに便乗しなければ、日々の暮らしさえも営むことも出来ない普通の市井の人の発する言葉です。

老若男女誰もが、パワーゲームをしながら生きずにはいられないのが、世の現実であり、私たちの姿です。

どんな方法と手段であれ、私たちみんなが力を欲しています。

その力のためならば人を傷つけることもいたしかたなく、時には積極的に良しとし、人の命だって自分が力を得るために利用する道具でしかなくなってしまふ。

これが、世のパワーゲームです。

だから、イエス様は、すべてのパワーゲームを放棄して、何ももたらさないパワーゲームに終止符を打つために、この地にいらっしやって、人間の成すパワーゲームの敗北の象徴である十字架に架かられました。

イエス様が世のパワーゲームに勝利することを目的としていたならば、貧しくて弱くて何も持たない夫婦の子どもとして、飼い葉おけにお生まれになる代わりに、ローマ帝国の最強の皇帝の長男として生まれなければなりません、そんなことはなさいませんでした。

全くもって、人間の成すパワーゲームという土俵で勝つことに、価値を見出さない姿でこの地上に来られました。

また、いくらでも、天の軍勢を動員して、ご自分を血みどろになるまでむち打ち、十字架に架けた、パワーゲームの勝利者たちを負かすことは出来ましたが、そんなこともされずに、黙って十字架に架かられました。

そしておっしゃいます。

ルカの福音書 4 : 18 (パウロ)

世のパワーゲームによって、貧しさを強いられている人たちに良い知らせを伝え、捕らわれ人を解放し、霊的な目が開かれていない人を霊の目を開き、虐げられている人を自由にすると、約束し、十字架に架かられ、

世のパワーゲームとは、全く次元の違う、罪と死に対する勝利を、イエス様は用意されました。

私たちキリスト者は、世のパワーゲームの“いびつな勝利”とは、全く次元の違う勝利に入れられた者たちです。

第一ヨハネの手紙 5 : 3 - 5 (パウロ)

そして、この主イエスにある勝利を得た者たちに勧める言葉が、ピリピ人への手紙2章の言葉です。

ピリピ人への手紙2：3-11（パウロ）

この御言葉は、世のパワーゲームに勝利することに、全くもって価値を置いていません。

だから馬鹿にされてもいいんです。
無理に、無駄に優位に立つ必要もありません。
見下されても構いません。
はずかしめられても大丈夫です。

だって、主イエスにある勝利があるんですから。
むしろ、へりくだって、人を自分よりも優れた者と思い、接していくのです。
だって、イエス様がそうされたんですから。

イエス様は、世のパワーゲームにおいては、馬鹿にされ、優位に立つこともせず、見下されましたが、神のパワーゲームにおいて、勝利され、高く上げられました。

私たちキリスト者は、この勝利を約束されている者たちです。

ダニエルは、ある意味、誰よりも世のパワーゲームに翻弄される人生を生きました。

そして、傷つき、痛みましたが、それでも、世のパワーゲームに勝利しようとは思いませんでした。

むしろ、まことの神にある、キリストイエスにある勝利を見上げ、世のパワーゲームに勝つことに、価値を置きませんでした。

だから、私たち負けていいんです。
何も無理して、無駄に勝つ必要はありません。

もちろん、主にあって、この世のパワーゲームに勝利することを恵みとして与えてくださることはありますが、それはあくまで、おまけで、メインではありません。

モーセは約束の地、カナンに入れませんでした。決して嘆いたり悲しんだりしませんでした。

なぜならば、カナンの地は、おまけであり、憧れていたもっと良い故郷である天の故郷の型でしかなく、影でしかないからです。

私たちの人生に起こるすべての嬉しいこと、喜ばしいこと、笑顔になることは、それ自体が目的ではなく、天の故郷のうれしさ、喜ばしさ、素晴らしさの型や陰でしかありません。

だから、そんな型や影を手に入れるために、
また自分を人よりも優れた者とするために、何も無理して、無駄に勝つ必要はありません。

勝利は、もうすでに、主イエスを信じる私たちの内にあります。

ダニエルは、世のパワーゲームの無益さ、はかなさ、暴力性を見せられ、そのパワーゲームに生きないように今一度、示されました。

「愛の不時着」で、もう一つ印象に残る台詞が出てきます。
それは、「この世の中が、平和で楽しいだけのお花畑のようであればいいのに。」
という台詞です。

この台詞を聞いて、世のパワーゲームに翻弄されている生きる私たち罪人の嘆きのように思えて、何だかこう、心が痛みました。

残念ながら、エデンの園を追放されて、人が作ったこの世界は、平和で楽しいばかりの世界ではありません。

でも、ダニエル書が教えている通り、
主イエス様は、永遠に平和で楽しいだけのお花畑のような世界の再創造を約束してくださり、主イエスを信じる者たちには、そこに住まう特権を与えてくださいました。

だから、私たちキリスト者は、
世のパワーゲームに勝つことを目的に生きるのではなく、まず一番近くにいる人を愛し、赦し、自分よりも優れた者と思いながら、真の勝利者であることを味わいつつ、歩んでいきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：ピリピ人への手紙 2：3